長崎新聞掲載／全3段（W378×H99）

布施の心 ⑧

本多 克也（題字も）
文・徳永 耕一

［挫折と帰郷］

一九五八年（昭和三三年）には東京タワーが完成し、一九五九年には皇太子明仁さま（現上皇さま）がご成婚と、この時代は祝賀ムードに湧いていた。

経済情勢も、一九五〇年から始まった朝鮮戦争による特需もあり、復興めざましく、ようやく戦後の混乱期を抜け出して、高度経済成長時代へと突入した。そして、経済白書にも書かれた「もはや戦後ではない」が、流行語にもなった。

国民にもエネルギーがみなぎり、誰もが今より良い明日を信じて働き、「三種の神器」と言われるテレビ、冷蔵庫、洗濯機を、競うように買い求めた。

しかし、私は金欠病に喘いでいた。

大学に入ってからは、少しでも家賃の負担を抑えるために、駒場にある大学の男子寮に移った。

その頃は学生の間でダンスパーティーが流行っていて、男子寮に女学生がやって来てダンスパーティーが開かれることもあったが、私には無縁のものだった。私は、それを横目で見ながらバイトに明け暮れる日々だった。

生活費のほかに学費も稼がなければならず、羨ましくはあったが、ダンスパーティーどころではなかったのだ。

ただひとつの楽しみは、寮の部屋で流行歌を口ずさむことだった。東海林太郎の「赤城の子守唄」などをよく歌った。

戦後すぐに、日本の街角には流行歌が流れ始めた。戦後の生活の苦しさの中で、国民は歌に癒しを求めたのだ。私も、いつの頃からか、歌が趣味になっていた。

質屋通いもした。大学の裏口にある質屋ではおじさんと馴染みになって、「お金に困ったら何でも持って来いよ」と言ってもらった。

実際、他の質屋では受けてもらえないような服や布団まで持ち込んだこともあった。

石川啄木の歌に、「働けどはたらけどなお我が暮らし楽にならざりぢっと手を見る」というのがあるが、まさにそんな状態だった。

働けどはたらけど
なお我が暮らし
楽にならざり
ぢっと手を見る

石川啄木の歌

しかし、実は私はそれほど状況を深刻には考えていなかった。「じっと手を見て」恨むわけでもなく、諦めるわけでもなく、与えられた境遇を運命として甘受して、なんとか局面を打開しようと前向きにもがいた。

それができたのは多分、化学が好きで、自分の道だと信じていたからだろう。それと、物事をあまりくよくよ考えない私の性分があったからだろう。

とは言え、身体はきつかった。大学二年になると目に見えて体重が減り、疲れも残るようになり、ついに二年生の終わり、栄養失調で倒れて入院した。

「これ以上頑張ったら、身体が夕メになる。身体がやられたら、元も子もない」

私は東京に来て以来、自分には身体だけが資本で、それしかないことを思い知らされていたので、学業へのやる気は十分残っていたが、一九六〇年三月、思い切って大学中退を決心した。

大学事務局に退学届を持って行くと、過去の成績などを見ながら幹部らしい方が、

「きみ、もったいないね」と言って、引き止めてくれた。

その気持ちは嬉しかったが、「身体が持ちませんので」と言って、一礼して大学の事務局を後にした。

中退の残念さは残ったが、しかし二年間の勉強期間は無駄ではなかった。自分なりに、与えられた時間と環境の中で精一杯頑張ったし、化学の基礎は詰め込めたと思う。

「いったん、田舎に帰ろう」

東京に来て足かけ五年、片時も忘れることはない故郷長崎だったが、それはいつも遠くにあった。今、急に目の前に故郷の色々なことが浮かんできた。

〈次回3月2日掲載予定〉

2023年3月本多産業株式会社は
設立50周年を迎えます。

本多産業株式会社

【本　社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814
TEL:045-869-1133

【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677
TEL:0957-38-3520